



## 地域の教育講演会からの提言

—子どもの荒れる源は大人社会にある—

### 三浦捷也

(三浦歯科医院 院長)

今から20数年前になるが、「生き生きとした子どもを育てる土壌をつくろう」「どの子にも生きる喜びと勇気とを」を活動目標に掲げ、地域の中学校の教育活動を支援する後援会を設立した。日々の活動の他は、年1回、県内外から講師をお招きして講演会を開催し、その回数は20数回にも及んだ。今改めて当時を振り返り、講演会の資料や講師の著書などに目を向けると、時代が変わっても、時を経ても、ますます輝きを放つ珠玉の言葉や、示唆に富んだ教えがある。

今、常識をはるかに超えた非人道的な少年犯罪が相次いでいる。その背景には彼らが育った過程における「家庭」や「周囲の大人」が大きく関わっている。子どもが心豊かに育つか、傷つき折れ曲がってしまうかは、親と大人の接し方次第だ。子どもは大人をしっかり観察している。大人と大人社会の不条理をそのままにして、子どもだけを変えようとする大人の言うことを子どもは信じない。今大事なことは、人間性を無視する大人社会を変えることではないだろうか。5名の方々の講演要旨などを紹介する。

『21世紀を生きぬく力』 寺脇 研  
(京都造形大学教授/元文部省医学教育課長)

「ゆとり教育」の生みの親であり、かつて「ミスター文部省」とも呼ばれた寺脇研先生は、「ゆとり教育」の弊害として、学力低下を指摘する声もあるが、「時代の転換期」には、従来と違ったことを学ばなければならない。それが総合的

学習などの「ゆとり教育」であると前置きをし、「学力」についての持論を語った。

寺脇先生は、明治から現代までの日本と世界の流れを読み解きながら、食糧やエネルギー枯渇が叫ばれ、誰かが一人勝ちする「弱肉強食の競争」では、もはや世界は成り立たなくなった。今の時代を「江戸から明治に切り替わった時、あるいは第二次世界大戦から立ち直った時と同じくらいの覚悟がある時代」と定義した。こうした時代の転換期を生きていく子どもたちは、これまでの受験勉強に使われてきた学力とは違う、新しい学力を身に付けなければならないし、それを培うのが学校週五日制や総合学習などの「ゆとり教育」と強調する。学校以外の中で、自分と異なる様々な人と出会い、学ぶことが大切である。受験するための学力とは、人間の能力のほんの一部に過ぎない。子どもたちがそれぞれの特性や能力を認め、自分の頭で考え、社会に出たときに自分で生きていける能力を身に付けることが大切だ。それを実現できる教育政策が必要だ。

『子どもたちに何が大切で、大人に何ができるか』  
むのたけじ(反戦ジャーナリスト/教育評論家)

▶腐ったおとなに寛大である社会は清純な子どもに対して必ず残酷だ。▶「学問」が「学歴」にすり替えられた。そこに不幸の根が張った。▶子どもは子どもを囲んでいる大人たちの状況しだいで、良くも悪くも別人のように変わる。

だから子どもだ。それが子どもだ。▶財産づくりに熱中するおやじに限って息子の教育につめたい。▶美しいと言える生き方があるとすれば、それは自分を鮮明にした生き方である。

※著書『詩集たいまつ』（評論社）より抜粋

『いま、子どもたちがあぶない』 田澤 雄作  
(独立行政法人国立病院機構仙台医療センター小児科長)

日本の子どもたちの養育環境は、私たちが育てられた時代から激変した。「目に見えるものは豊か」ですが、「目に見えないものが貧しい」時代が変わった。この現代社会の中で、子どもは息をひそめて寂しく生きている。その結果として、多様な未曾有の子どもの社会的事件の現象が生まれていると考えています。

赤ちゃん時代から始まる過剰なメディア漬けや、家族や人間の絆が希薄な養育環境の中で、未成熟な脳（心）のまま思春期を迎えている。更に、行き過ぎた競争教育のなかで、睡眠時間や休息時間が削られ、脳の慢性疲労を進行させ、人間としての大切な笑顔、感情、言葉まで失っている。結果として、ムカツキ、キレル、うつ病、不登校などのほか、反社会的事件にまで発展している。幼い子を持つ家庭で注意すべきことは、まず、テレビ漬けの生活を断ち切ること。睡眠を十分にとらせ、体と脳の疲労を解消させることに心掛けるべきだ。子どもの心の病気を防ぐカギは家庭のあり方にある。

『スカウトから見た伸びる選手の条件』

山田 正雄（北海道日本ハムファイターズ  
前ゼネラルマネージャー/現スカウト顧問）

山田正雄氏はプロ野球選手、スカウト、GMとして50年間プロ野球と関わってきた。その間、ダルビッシュ有選手、大谷翔平選手、吉田輝星選手などの入団に深く携わった。ファイターズ

補強の最高責任者の一人である。

山田氏は「アマチュアの若い選手たちの懸命なプレーを見るのが大好きで、スカウトは私の天職」としたうえで、「選手を選ぶ条件」として次の点を挙げた。▶体格や技術よりも性格を重視。▶「野球という物差し」以上に「内面を強く押し量る」。▶選手の本質が見えるのは試合よりも日頃の練習。▶選手のちょっとした態度や仕草に人間の気持ち表れる。▶好きな野球を大切にしている人にプロで勝負するチャンスを与えたい。最後に、子どもの指導に関しては「良いところを見つけ、評価し、褒めて、子どものやる気を引き出してほしい」と訴えた。

『いい子の非行』 佐々木 光郎  
(静岡英和学院大学教授/元家庭裁判所調査官)

「90年代以降、素直でまじめな、いわゆる『いい子』による犯罪が目立ってきた。『いい子』の多くは親が喜ぶことが善である…。と脳に記憶させて成長している。子どもは期待に応えるために頑張り続けるが、行き過ぎると親の前でも、悩みやストレスを吐き出せなくなる。これが本人ですら自覚できない『心の抑圧』になっている」と強調した。

佐々木教授は「心の抑圧」の背景となる親の姿として、▶「自分の子どもさえよければいい」とする自子主義。▶「成績さえよければいい」という狭い考え。▶勝ち組志向が強く、「過度に教育熱心な家庭」を挙げた。

非行臨床で出会う親たちの本心を探りながら気づくことは、彼らが「教育熱心」を隠れ蓑にし、自らが積み残してきた問題を子どもに転嫁している。子どもを「道具化」「私物化」している。「子どもが独立した人格の持ち主であることを忘れてはならない」と結んだ。